寄稿

後編 池波正太郎

司馬遼太郎×池波正太郎　生誕100周年記念

歴史・時代小説は大人の日本人の嗜み、そして永遠の友

――二大国民作家の代表作から、今なお輝き続ける巨匠の魅力を探る――

司馬遼太郎記念館友の会　サポート会員
メインストリート・マネジメント・リサーチ合同会社　代表
松本　博之

後編は池波正太郎（以下、池波さん）の人生を振り返りながら、鉄板ネタでもある「鬼平犯科帳」、「剣客商売」と「仕掛人・藤枝梅安」を取り上げて池波さんの魅力に迫ってみたい。

池波さんは歴史小説と時代小説について次のように語っている。「歴史小説と時代小説の違いはどうでもいい。歴史小説とは、歴史の資料を克明に調べて、その中から論断と観察を生み出すもので、時代小説とは、歴史を背景にしたフィクションである」と。池波さんの作品は「時代小説」というジャンルの中で今でも燦然と輝いていると言えよう。

壱　池波さんの半生
～株屋から都庁職員、そして脚本家へ～

池波さんは13歳から働き始めた。自身では、「僕は13歳から世間に出ているので、これが時代小説を書くのに役立っているかな。同じ世代の人が大学を出てから世の中に出てくるまで10年早く出ている、戦前のいろんな風俗や奇妙な人間がまだ残っている時代ですからね。」と語っている。

13歳で働き始めたのが「株屋」であった。今の証券会社ということになると思うが、池波さん曰く「当時の株屋は、博打打ちですよ、鼻つまみで、どこへいっても信用されない。儲けたカネも身に付きません。結局、戦争に行くちょっと前までつづけていた。」と述懐している。

復員して、株式取引所が閉鎖されていたため都庁の職員となり、衛生保健の仕事をすることになった池波さんだが、文才はあったようである。小説を書く気なんて全くなかったそうだが、当時読売新聞が主催していた「読売文化賞」というものがあって、面白半分に芝居を書いたら入賞したというのが文筆活動を始めるきっかけであった。（翌年も入賞されている。）

その後読売文学賞の審査員だった長谷川伸の下へ弟子入りし、脚本家と都庁職員の“二刀流”公務員となった。“時代物”を書くようになったのは、新国劇（※1）の座付き脚本家をやり始めて4作目か5作目くらいからで、長谷川伸に才能を認められて都庁を辞め、脚本家として一本立ちした。当時は新国劇の全盛時代でせっせと脚本を書いたそうである。「新国劇は必ず東京、大阪、名古屋と公演するので脚本料も3回分入る。1年に2～3本書けば、どうにか生活していける」という状況だった。その後長谷川伸が主催する「演劇研究会」に入り、その技を徹底的に勉強する機会を得て、小説家としてデビューすることになった。

※1　1917(大正6)年に結成された劇団。「剣劇」を創出したことで知られ、リアルな立ち回りを多用した時代物で戦前から戦後にかけて男性客を中心に人気を得た。

弐　直木賞受賞まで苦労する
～司馬さんと“同期の桜”～

池波さんの記念すべき最初の小説は現代もの「ジェット・パイロット」、最初のころは脚本家の気分が抜けず、舞台装置を書かないと小説に入っていけなかったそうである。

初めて直木賞にノミネートされたのが昭和32年、初回を含めてノミネート5回、ことごとく崩れ去っていった。そして「池波には直木賞は取れない」と囁き始められた矢先、第43回（昭和35年上期）の直木賞を受賞、6回目の候補作「錯乱」でのことであった。この時の池波さんの言葉がある。「大変だったろうと

言われますが、そうでもなかった。新国劇で脚本が上演されるまで、30 本もお蔵入りしているので、慣れっこだったとも言えます。候補になっただけで、うれしさの方が大きかった。」

直木賞受賞についてだが、司馬さんが直木賞を受賞したのが前年の第 42 回（昭和 34 年下期）で、この授賞式が年を越えた昭和 35 年に行われたこともあって、司馬さんは「私と池波さんは同じ年に直木賞を受賞したんです」と言っている。持つべきものは“同級生”、二人の仲の良さがうかがわれる。この頃、池波さんは大阪にいくと必ず司馬さん宅を訪れていたそうである。しかしながら昭和 40 年以降は二人とも大変忙しくなって、残念ながらほとんど親交はなくなってしまった。

参 人気作品にみる池波さん

時代小説作家の名を揺るぎないものにした「鬼平犯科帳」

これから紹介する池波さんの 3 作品についてよく言われることが、「鬼平犯科帳」は組織運営やリーダーシップ、「剣客商売」は家族、師弟関係の在りよう、「仕掛人梅安」は個と個の結びつきや人間の信頼関係についてそれぞれ象徴しているということである。

直木賞受賞まで苦労された池波さんだが、彼が時代小説家として認められ、その後の人気作家、国民作家としての道を拓いていった作品は、何と言っても「鬼平犯科帳」である。

鬼平犯科帳で捕物話の新境地を開く

ある文芸評論家の論をお借りすると「鬼平犯科帳は長い捕物小説の歴史に革命をもたらしたものと言ってよいだろう。まず『鬼平捕物帳』ではなく、『犯科帳』と命名したところに池波さんのセンスがうかがわれる。」と言っている。それまでの捕物小説の内容は「親分、てーへんだ、てーへんだ」と下っ引が駆け込んで物語が始まり、犯人が捕まってめでたしめでたしというお決まりのパターンであった。

しかしながら池波さんは鬼平犯科帳を勧善懲悪で一件落着とせず、それまでの捕物小説とは完全に決別したものとした。これにより鬼平犯科帳は従来にない新鮮さが魅力となった。小説だけでなくテレビ、映画やコミックスなど幅広いメディアミックスの奏功などもあって、大きな反響を呼び、現在でも映画化 (2024 年新作公開予定) されるなど輝きは失っていない。

話はやや横道に逸れるが、推理小説の世界に“清張以前”と“清張以後”という言葉があるそうで、それまでの怪奇でグロテスクなムードに包まれ、一部のマニアに独占されていた推理小説に日常性と社会性を導入する松本清張の出現によって、推理小説に大きな転換点をもたらしたことを指すそうである。そうであるならば、捕物小説の世界には、“池波以前”と“池波以後”、または“鬼平以前”と“鬼平以後”という言葉があってもよいだろう。鬼平犯科帳の作品としての斬新さは、それほどのインパクトをもたらしたと言えるのである。

余談ながら…

エッセイ：「若いころの池波さん」司馬遼太郎

池波さんは昭和 39 年の東京オリンピックの準備で、東京が別な都市に変わりつつあるころから、変わらざる町としての江戸を書き始めた。この展開がはじまるのは、昭和 42 年開始の「鬼平犯科帳」からである。そして昭和 47 年からは、「剣客商売」、「仕掛人梅安」などがはじまる。（中略）このため、池波さんは大阪へ来なくなったが、べつに遠くなったのではなく、私も「鬼平犯科帳」以後の池波作品の住人になった。いずれも不朽のものである。

5 年も続くとは思わなかった

鬼平犯科帳は「オール読物」の昭和 42 年 12 月号に掲載された「浅草・御厩河岸」を第 1 作として、これが大好評だったために、翌 43 年 1 月号掲載「唖の十蔵」から「鬼平犯科帳」という通しタイトルがつくようになった。作者である池波さんの死によって未完に終わった長編「誘拐」まで合計で 131 編からできている。江戸中期に実在した長谷川平蔵宣以こと火付け盗賊改方長官は、池波さんが創出した「鬼平ワールド」の中で昭和 42 年から平成 2 年まで活躍した。

池波さんは主人公の長谷川平蔵という実在した男にかねてより大変興味があったそうである。連載の 5 年ほど前から、いつか書きたいと思っていて、最初は平蔵の一代記を書こうと考えていた。1780 年前後、文化・文政の一歩手前で徳川家斉が十一代将軍を継いだとき

余談ながら…

「鬼平犯科帳」のおすすめ作品

池波さんの自選

□盗法秘伝　□山吹屋お勝　□大川の隠居

□本門寺暮雪　□瓶割り小僧

中村吉右衛門さん（鬼平役）が好きな作品

□本所・桜屋敷

□熱海みやげの宝物　□雲竜剣

に、平蔵は 42 歳で火付け盗賊改方長官に就任した。彼については、「寛政重修諸家譜」という史料の中にも出ており、滝川政次郎博士という方がだいぶ研究されているが、資料的にわからないところが多かったという。そこで池波さんのオリジナルの発想によってこれほどの大きな作品となったのではないだろうか。

加えて池波さんは「鬼平犯科帳の連載が始まったとき、5 年間もつづくと思わなかったし、つづけるつもりもなかったんだけどね」とも語っている。

小説：鬼平犯科帳の魅力

江戸時代の独自の機動性と特権を持った特別警察、火付盗賊改方を登場させて、その長官をつとめた長谷川平蔵という実在の人物を主役に据えたことが何より新鮮であった。平蔵配下の与力や同心、密偵と敵対する盗賊たちについても詳しく描いて、複雑で重厚な人間関係をわかり易い筆遣いで表現しているところも物語に幅を見せている。また、平和な日常と犯罪、善事と悪事の狭間で人々が苦悩や葛藤をする姿や、人生をかけた恋路についても描いているところも魅力である。

池波正太郎画 長谷川平蔵市中見廻りの図
「池波正太郎記念文庫」©IKENAMI TOYOKO

鬼平犯科帳の中には、「悪」の中に、実は小さいけれど「善」が見えたり、曇りのない「清」と思いきや、実はちょっとした「濁」が見えたりするという場面によく遭遇する。決して勧善懲悪では語ることができない人間の性（サガ）を描いているのである。

また決して悪には容赦のない平蔵だが、そこに情愛と思いやりを忘れない姿や、江戸の市井の人々の細かな人間描写によって読者の涙腺を緩くさせるという池波さんの物語の運び方も読者を魅了しているのである。

決してスーパーヒーローではない平蔵

鬼平こと長谷川平蔵は、父・宣雄と長谷川家の下女との間に生まれた子供である。出生後に父宣雄が家督を継ぐために姪の波津を正妻にしてからは、その養母に「妾腹の子」といじめぬかれて育った。若いころからの名は「本所のテツ」「入江町のテツ」で、家にはよりつかず、深川あたりの盛り場や悪所をうろつき、無頼共と暴れまわっていた。その後、剣術の稽古に打ち込み、一刀流高杉銀平道場へ通うことになる。28 歳で亡父（京都町奉行）の後を継いで、二の丸・書院番、同御徒頭などをへて天明 7(1787) 年 9 月 19 日 42 歳のときに火付け盗賊改方の御頭に就任し、10 年間盗賊追捕の職務を遂行するという人生を歩む。実在した長谷川平蔵は、石川島に人足寄場という死罪以外の囚人を教育、保護し、種々の内職をさせる出獄後の更生施設を作ったことで有名で、筆者の高校時代には日本史の教科書にも載っていた。

長谷川平蔵が単なる捕物に優れたヒーローではなく、このようなバックグラウンドを持った人物であることを物語の中に上手くアクセントとして盛り込むことで、彼の人間的魅力をより際立たせているのではないだろうか。

現代小説としての時代小説：鬼平犯科帳

「すぐれた時代小説は時空を超え、すぐれた現代小説でもある」と言われることがある。まさに鬼平犯科帳、いや池波さんの作品がそうなのだろう。我々現代人の生活や心情に主題と感覚があって、時代の流れに左右されることなくうまく際立たせたとき、時代小説は時空を超えて現代人に我々の胸の中に大きく響いてくるのである。登場人物の喜悦、苦悩、葛藤、憤怒、悲嘆などが現代的であるときに時代小説は現代小説として大いに評価されてくるのであろう。

老剣客の日常を巧みに描く
「剣客商売」

江戸の市井の人々の人情話

「剣客商売」は、江戸の市井の人々の日常生活や人情を描いた代表作である。暇を持て余した老剣客の主人公秋山小兵衛は好奇心旺盛で、武家社会がかなり緩み、壊れかけた時代に敢えて「剣の道」を商売道具として、息子の秋山大治郎と「悪」をなす者を懲らしめるという物語である。

登場人物としては、小兵衛の他に、40歳も年下の妻おはる、行きつけの料亭「不二楼」の人々、御用聞きの四谷の弥七親分、その子分の徳次郎、そして市井の人々の対局にある老中田沼意次とその娘三冬などである。これに小兵衛が剣客として生きてきた間に生じた因縁ある人々、江戸市中の大店の主人や幕閣の要人らも含めた人間模様が折り重なって展開していく。小兵衛は時には本意なく事件に巻き込まれていくのである。

シリーズ第1作の「女武芸者」が書かれたのは，池波さんが49歳の時で、最終作の「浮沈」は66歳の時であった。シリーズは本編が16巻、番外編が2編となっていて、各巻が独立した物語となっているのでどこから読んでも構わない構成となっている。池波さんの急逝でシリーズは未完となってしまったが、池波さん曰く「秋山小兵衛は93歳まで生き、本編は小兵衛の孫である小太郎の活躍を描くものになっていた」そうである。残念、残念。

剣客の老後とその人生

主人公の秋山小兵衛は、もとは甲斐の国の郷士の出身で、12歳の時に無外流、辻平右衛門の弟子となり、本格的に剣の世界に入っていく。平右衛門が引退してからは、四谷に自分の道場を開いて、諸大名や大身旗本から、近隣の農民まで、実に様々な人々に剣術を伝授していた。その後、50代後半で鐘ヶ淵に隠棲すると、農家の娘で40歳も年下の女中のおはると結ばれて正式な夫婦となった。

物語の中の老剣客の小兵衛は、清濁併呑とでも言おうか、清流と濁流の中を飄々と泳ぎ回る人物として描かれている。善悪、表裏、醜美といったものが渦巻く江戸の市井を時には剣術を使い、時には知恵を絞ってしぶとく生きていく姿が描かれている。また江戸の剣客界にようやく頭角を現し始めた第一子、大治郎が欲のない純情一途な堅物として、小兵衛とは好対照に描かれているのが話に幅を持たせている。

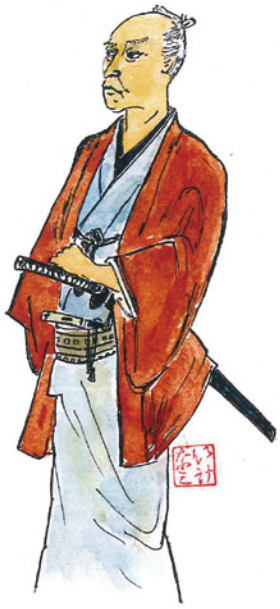
ファミリー小説としての魅力

剣客商売は、多くのひとから「ファミリー小説」とも言われている。「家族こそが社会の基本」という池波イズムが典型的に表れているとも言われ、自分自身と息子大治郎、若すぎる嫁おはるとの関係、後に結婚する大治郎と三冬の舅としての小兵衛の眼差し、孫小太郎への溺愛など様々な家族とのエピソードが散りばめられて物語は進んでいく。

そしてもう一つの特徴としては、ファミリー小説であるがため「剣客」の話でありながら、求道者たる剣客のイメージがほとんどないところも面白いと言えよう。秋山小兵衛の59歳から67歳までが描かれていることもあって「老い」や「死」の問題も多く、現代の高齢社会に通じるところもある。

主人公、秋山小兵衛のモデルがいた

池波さんの話によると、秋山小兵衛の人物像にはモデルがいたそうである。秋山小兵衛のモデルは、池波さんが戦前株屋で働いていたころの別の店の主人で、吉野さんという老人であった。剣客でもなんでもないが、八丁堀に元芸者だった若い女を囲っていた。「池波君、精をつけなくちゃいけません」といって、浅草・前川の鰻を一度に3人前食べるような人だった。この吉野さんをモデルとして、人気の3大連載のなかで最も長い期間、十分に構想を練ってから書き始めた作品であった。



池波正太郎画 秋山小兵衛の図
「池波正太郎記念文庫」©IKENAMI TOYOKO

医師と殺し屋の二刀流
「仕掛人・藤枝梅安」

「仕掛人」は池波さんの造語

仕掛人梅安は、品川台町に診療所をかまえる鍼医者である。坊主頭で体格は６尺近い大柄で肥満、無愛想で気まぐれだが、その腕は天下一品で尊敬されており、連日、助けを求めてくる患者は引きも切らないという 35 歳の独身男だった。しかしながら、裏の顔は、金ずくで殺しを請け負う殺し屋「仕掛人」。「仕掛人」という言葉は、この小説のため池波さんが造った造語である。梅安の相棒が楊枝職人の彦次郎、それに元剣術道場の代稽古をやっていた小杉十五朗も加わるというプロ軍団を率いていた。

昭和 47(1972) 年小説現代３月号に掲載された短編「おんなごろし」、次作の「殺しの四人」で小説現代の読者賞を受賞、すかさずテレビドラマ化された「必殺仕掛人」が大ヒットし、多くの類似したテレビシリーズがつくられた。

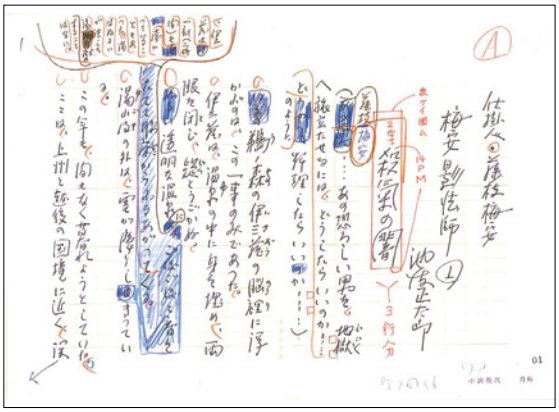
独自の造語で、江戸の闇社会の描く

仕掛人梅安の魅力の一つに池波さんの数々の造語がある。先述のように「仕掛人」という言葉から池波さんが考えだした造語なのだ。江戸時代にも金ずくで人を殺した殺し屋稼業があったかもしれないが、彼らは決して仕掛人などと呼ばれていなかったはずである。今では当たり前のように使われている仕掛人という言葉は決して歴史上の言葉ではない。

それからこれらも池波さんの造語で、“殺しの依頼人である「起こり」、殺しの仲介役（元締め）が「蔓」（つる）です。彼らによって「仕掛人」の仕事が生まれてくるのです。そして彼らの社会には、その掟に背いた人や仕掛けを失敗したら厳しい掟というものが待っているのです。”その掟は当然のごとく死によって償わなければならないのであった。

また鬼平犯科帳の時と同様に、人の名前の付け方にも凝っている。梅安の良き理解者で香具師の元締め「音羽の半右衛門」や、梅安らと死闘を繰り広げる大阪の香具師の元締め「白子屋菊右衛門」などがそれである。

このほか鬼平犯科帳の中でよく使われる江戸の闇社会の象徴たる「盗賊」たちが使う言葉も池波さんの造語であるものが大半である。



「仕掛人・藤枝梅安」自筆原稿
「池波正太郎記念文庫」©IKENAMI TOYOKO

「殺し」をテーマで長く書けず

全７冊（未完）のシリーズは、梅安が仕掛人となった経緯を差しはさんだ第１話「おんなごろし」から始まる。仕掛け人梅安は池波さんの死で未完となっているが、池波さんは仕掛人梅安についてこんなことを言っている。「やはりね、そうは殺せないですよ。金を貰って殺すのがね。気分的に毎月書くっていうわけにはいかない。毎月毎月ね、金を貰って人ごろしすることになりますからね」、「うーん、とにかく書いている小説で、これが一番むずかしいですよ。『鬼平』よりも、『剣客商売』よりも。」

シリーズ第１巻「殺しの四人」のあとがきに、「人間は、よいことをしながら悪いことをし、悪いことをしながらよいことをしている」という主題が強調されている。梅安・彦次郎の私生活における生態に結びつけ、医者であり殺し屋である梅安の悩み、人生の課題やトラブルとも向き合い、厳しい現実とも真正面から向き合っているのが「仕掛人」梅安シリーズの特徴である。

池波さんは、あるインタビューで梅安の胸の内を次のように語っている。「ほんとは医者として生きていくのが当然であり、仕掛人はやりたくないんだから。だけど前からのいろいろな因縁があるから、断るわけにはいかないわけだよ。みんなの秘密を知ってるから。だからいやいやながらやるわけだ。」作品全体が静かな筆使いで書かれているのは、こうした梅安ら仕掛人たちの厳しい状況を踏まえてのものだからなのかもしれない。

鬼平犯科帳のところでも触れたが、簡単に善悪を決められない様々な矛盾を抱えている人間の精神性を追求していることや、「善いことと悪いこと」の間で定まらない人間の心の動きなどを細かく描写していること、そして人間のダークサイド面で信頼や友情が一抹の光となっていることが、さらなる強い求心力を生み出しているとも言える。仕掛人梅安は長期間人気となったテレビシリーズや映画が示すように、現代人の共感をも得ることになっていく。

肆 池波さんと埼玉県

鬼平率いる火付盗賊改方は、基本的には江戸市中の治安維持を使命としている。しかしながら盗賊の探索や捕縛のために鬼平自ら、また配下の与力、同心や密偵たちが江戸市外にも出かけることも少なくない。また盗賊たちが江戸市中に入るための旅の途中の描写として、埼玉県のある武州や上州などの町や宿場の様子なども池波さんは書いている。

なかでも武州（埼玉県内）の各地が非常に多く出てきているというのも気のせいではないように思われる。そこには池波さんの埼玉県内での幼児体験が影響しているかもしれない。ご承知のように池波さんは東京・下町、浅草の生まれだが、生まれて間もなく関東大震災で被災し、当時の浦和（現さいたま市内）に移り住み、６歳まで過ごしている。

鬼平犯科帳の中に出てくる埼玉県内の地名

このように幼少期を浦和市（現さいたま市）で過ごしたからか、鬼平犯科帳の中にも、埼玉県内の地名がよく出てくる。最後にそれらをお知らせしよう。以下の通りである。

第一巻「血頭の丹兵衛」：熊谷、蕨、
「老盗の夢」：蕨
第二巻「谷中・いろは茶屋」：川越、粕壁
第四巻「あばたの新助」：越谷
第五巻「山吹屋のお勝」：桶川、岩槻
第六巻「猫じゃらしの女」：深谷
「大川の隠居」：川越
「のっそり医者」：大宮
第七巻「はさみ撃ち」：粕壁
「かい掘りのおけい」：川越
第八巻「流星」：川越
第九巻「浅草・鳥越橋」：川越
第十一巻「穴」：川越
第十二巻「高杉道場・三羽烏」：鴻巣、浦和、
「白蝮」：川越
第十三巻「殺しの波紋」：鴻巣
第十六巻「火つけ船頭」：草加
第二十一巻「泣き男」：川越
第二十二巻（特別長編）
「迷路」：深谷、大宮、上尾、熊谷

余談ながら…

池波さんと浦和の思い出 ―「おとこの秘図」より

関東大震災で、浅草の家を焼かれた父母は、一時、埼玉県・浦和に移り住み、父は汽車で東京の店へ通っていたのである。

私のもっとも古い記憶は、おおよそこのころからはじまっているようだ。現代の浦和市からは、まるで想像もつかぬ田園風景の中で生まれた年から六年間をすごした。その生活は五十年をこえた現在に微妙に作用していることを、何かにつけて感じることができる。

人間の記憶がおよそ、四、五歳のころからはじまるように、この年齢における生活はその人の一生にぬきさしならぬ影響をおよぼすということだ。

伍 おわりに

さて前月号での司馬遼太郎と、今月号の池波正太郎の人生と作品について紹介するとともに、二人の国民的作家の魅力について思いを巡らせた。まだまだ書き足らない部分もあるが、歴史小説・時代小説の巨星の作品を改めて読み直してみたくなったという方が多くおられることを期待しつつ、終わりにさせていただきたいと思う。

主な引用・参考資料
・池波正太郎記念文庫図録
・別冊太陽 池波正太郎（平凡社）
・KAWADE ムック 池波正太郎（河出書房新社）
・ずばり池波正太郎（文春文庫）
・池波正太郎劇場（新潮新書）
・おもしろくてありがたい（PHP 文庫）　他 多数